
襖

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

襖

【Nコード】

N6009D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

妙子は襖の向こうに何かがいるかと思うと怖くて仕方がなかった。だがどうしてもその襖を越えなくてはならなくなり。小さい子供の恐怖心を扱った作品です。

第一章

襖

小さい頃怖いものがあつた。

それは何かというと襖だつた。それがやけに怖かつた。

妙子はいつも襖を見ては脅えていた。幼い頃の記憶だつた。

「何でもない筈なのにね」

大人になつた今でもくすりと笑つてそんな話をする。話をしてもそれでもまだ襖を見てまだ怯えが目に見られている。その目で語るのであつた。

「怖かつたのよ」

「そうだつたんだ」

「ええ、そうだつたのよ」

そう僕に言う。

「それがどうしてかつていうとね」

「どうしただつたんだい？」

「少し長い話になるけれどいいかしら」

その整つた顔を僕に見せて尋ねてくる。

「それでも」

「いいよ。それでどんな話なのかな」

「ええ、それでね」

僕の言葉を受けて話をはじめてきた。

「その話だけねどね」

「うん、それは一体」

僕は黙つてその話を聞くことにした。彼女の幼い頃の話であつた。妙子の家は古い家だつた。所謂屋敷であり全て和室であつた。

和室といえは襖と障子である。向こう側が見える障子は好きだつたが見えない襖がどうしても怖くて仕方がなかつたのだという。

「隣に何がいるのかしら」

彼女が襖の向こうで考えるのはそれであった。

「何がいて何をしているのかしら」

幼い頭の中で考えるのだった。襖の向こうには誰がいるのか。それを考えると気配を感じるようになる。誰がいるのか見たくなくなる。けれどその襖を開けて誰がいるのか考えると。どうしても怖くなるのであった。

「お父さんやお母さんじゃないかも」

両親だけが家にいるとは考えられなかったのだ。子供心には。

「ひよっとしたら他の人かも。いえ」

そうしてさらに怖い考えになるのだった。

「お化けかも。そうしたら」

襲われて食べられてしまう。そう考えると怖くて仕方がなかった。だから襖を開けることができなかった。近づくことすら怖かった。そうした時はいつもお父さんかお母さんにその襖を開けてもらう。その時もその足にしがみついて離れないのであった。

「妙ちゃんは何を怖がっているんだい？」

「それがわからないのよ」

お父さんもお母さんも妙子がどうしていつも怖がっているかわからなかったのだ。

「どうしてなのか」

「わからないのか、御前も」

「ええ。貴方は？」

「俺もだ」

お父さんもそう答えるだけだった。

「家の中にいるのは家族だけなのに」

「そうよね」

そうなのであった。だが彼等はそれを大人の目線で話していてそれは決して子供の目線ではなかった。だから妙子が怖がる理由に気が付かなかったのだ。

しかし気付かなくとも心配なのは事実である。親としては子供が

怖がるのは見ていられない。そうして二人はあれこれと話をするのであった。

「怖い話でも読んだのか？」

「テレビかも」

二人が考えたのはそこであった。

「漫画とか選ぶか」

「ビデオも選びましょう」

二人はそう言い合う。

「さもないとこのままずっと怖がったままよ」

「じゃあ御前の持つている怪奇漫画は捨てるか奥にやるかしら」

「貴方のビデオもね」

「ああ、そうしよう。それにしても何か最近特におかしいな」

お父さんは首を傾げるばかりであった。

「本当に何か見たのかな」

「そんなこと言わないでよ」

お父さんの言葉にお母さんも怯える顔になった。

「この家にいるのは私達家族だけでしょ」

「そうだな。じゃあ何もないか」

「ない筈よ」

怯えているせいか言葉が少し不安定になっていた。

「そんなの決まってるじゃない」

「それもそうだな。しかし」

「ここでお父さんはまた首を捻りながら言っただった。

「何とかしないと。妙ちゃんを」

「ええ、そうね。あのままだといけないわ」

二人は娘を心から心配していたのだ。まだ幼い一人娘を。この時はまだ妙子一人だったのだ。後で三人も妹ができるにしろだ。

第二章

妙子はそれから襖が怖くて仕方がなかった。そうして襖に近付くことすら怖くていつも開けておいたままにしたりしていた。それが暫くの間続いた。

しかしそれが終わる時も来た。ある時のことである。

部屋で一人遊んでいた。しかし不意に家のチャイムが鳴った。

「お客さん？」

「妙ちゃん、出てくれる？」

すぐにお母さんの声がしてきた。

「お母さん今手が離せないの、お父さんも」

「何をしてるの？」

「お料理作っているのよ」

そういうことであった。妙子の家ではお父さんも料理の手伝いをする。だからこれは妙子にとっては自然のことであったのだ。

「だから出てくれるかしら」

「わかったわ」

口ではお母さんにそう応える。そうして遊ぶのを一旦止めて立ち上がる。しかしここで。

目の前に閉じられた襖がある。妙子はその襖を見たのだ。

「襖……」

開けるのどころか近付くことすら怖かった。本当に何がいるのかわからなかったからだ。

行かなければならない。それでも足がすくんでしまっていた。怖くて動かないのだ。動けないでいると不意にお母さんの声がまた聞こえてきた。

「妙ちゃん？」

「何？」

妙子はお母さんのその言葉に答える。だが答えるだけであった。

「どうしたの？そつちに何かあるの？」

「何も無いよ」

一応はそう答える。だが動けないことには変わりがなかった。

「じゃあ御願いな。あっ」

「どうしたの？お母さん」

「おい、お母さん」

ここでお父さんの声がした。

「大丈夫かい？」

「え、ええ」

「大丈夫つて」

今のお父さんとお母さんの言葉を聞いて急に心配になった。不安ではなく心配なのである。

「お母さん」

無意識のうちに身体が前に出た。何時の間にか襖に感じている恐怖はなくなった。そうして。

「どうしたの？」

お母さんに聞きながら襖を開けた。そこには何もいなかった。だがそれすらも彼女は気付いてはいなかった。

「何かあったの？大丈夫なの？」

「え、ええ」

するとここでお母さんの答える声が返ってきたのであった。

「大丈夫よ、妙ちゃん」

「そうなの」

「ちよつとお皿を落としただけだから」

どうやらそれだけであつたらしい。驚いたがそれは大したことがないようであった。妙子はまずはそのことにほっと胸を撫で下ろすのであった。

「よかった」

「それで妙ちゃん」

お母さんがまた言ってきた。

「うん」

「お客様御願いな」

「あっ」

言われてそのことを思い出した。そしてもう一つのことも。

「玄関に出て。御願いな」

「わかったわ」

お母さんの言葉に答えると共に後ろを振り返る。そこには開かれた襖とその向こうの今まで彼女がいた部屋があるだけであった。おもちゃや絵本が無造作に転がっているだけであった。

そして今いる部屋には何も無い。ただ彼女がいるだけでその影が見える。それだけであった。

「何もいないんだ」

妙子はその自分だけがいる部屋の中で呟いた。聞こえるのも彼女の声だけであった。

「いるのは私だけなんだ。それだけなんだ」

それがわかった。襖の向こうには誰もいないことがわかった。彼女がそこに入るまでは誰もいないということを知ったのだ。

「何だ、それだけだったんだ」

わかってしまえばどうということはない。ただその中で笑うだけだった。

「怖くとも何ともないんだ」

それを心の中で確かめてお客さんの相手に向かう。妙子の幼い頃の恐怖はこうして何事もなく消え去ったのであった。

第三章

「それだけだったのよ」

大人になつた妙子は今も自分の生まれ育つた家にいる。そうしてそこで僕達に対して自分の幼い頃のことを話していたのだ。

「それだけ。何もなくてね」

「ただ向こうが怖かつたんだね」

「そうだったのよ」

にこりと笑つて僕達に話してくれる。彼女の家は古い和風の家であるから部屋は殆ど襖で仕切られている。それがちよつとした迷路にも思えた。合わせ鏡の迷路にである。

「それだけだったのよね。私が勝手に怖がっていただけ」

「けれど。それってわかるよ」

仲間のうちの一人が彼女に伝えて言ってきた。襖を一つずつ開けて部屋を進みながら。部屋と部屋が見事につながっている。襖で仕切られただけで。

「ドアとかでもその向こうに誰がいるかって思うとね」

「怖いよね」

他の仲間もそれに頷く。

「特に子供の頃はね」

「私にとつてはそれが襖だったのよね」

妙子もそれに応えて言う。

「この白い襖の向こうに誰がいるかって思つて」

「お家の人の他に誰もいないってわかつていてもだよね」

「だから余計に怖いのよ」

この気持ちは僕もわかるものだった。誰にもそんな恐怖を感じる
ことがあるからだ。

「その筈なのにつてね」

「そつだよね」

「それで誰がいるのかって」

そうした不安も抱く。妄想なのだがそれが止まらなくなるのだ。

「どうしても怖くなつてだったのよ」

「けれどいざ襖を開けてみると」

「これがね」

ここで彼女は襖の一つに手をやる。そうしてそれを引いて開ける。

「何も無いわよね」

「そうだよ。そして誰もいない」

「それでも怖くてね。どうしても」

笑つて僕達に話しながら襖の先の部屋に入る。やはりそこにも誰もいない。

「動けなくなるんだよね」

「子供の頃つて不思議よね」

彼女はまた笑つて僕達に対して言ってきた。

「そうして何でもないのに怖くなつてそれが急に消えて」

「子供の頃はね。誰だつてそうだよ」

今度は僕が彼女に答えた。自分の子供だった頃も思い出しながら。どうしても見えていないものが怖くて仕方なかった頃を。

「それでもそれがある日急に消えていて」

「忘れてしまうのよね」

「そういうものだよ」

僕は彼女に言った。

「子供つていうのはね」

「そういうものなのね」

「だと思つよ。それでそれをある日また急に思い出したりね」

「そうなのよね。本当に訳がわからなくて」

「思い出したらあれだよ」

また仲間の一人が笑いながら彼女に声をかけてきた。楽しそうな笑みだった。

「また襖の向こうに何かいるかもつて怖くなるかもね」

「まさか」

彼女はそれを笑って否定するのだった。

「それはないわ」

「本当に？」

「じゃあやってみせるわよ」

また次の襖の前まで来た。そしてその襖にも手をかける。

「この向こうに何がいるかないのか。賭ける？」

「いるかもね」

「ひよっとしたら」

「そうだね」

僕も含めて仲間達はあえてこう言うのだった。かなりというか完全に冗談で。

「じゃあ私はいないと思うわ」

妙子だけがそちらに賭けた。

「それでいいわよね」

「うん、それでいいよ」

「じゃあいるかどうかは」

「これでわかるわ」

彼女は自分の言葉と一緒に襖を引いた。そこにいるのは。

「勝ちね」

彼女は向こうの部屋を見てにこりと笑う。そこには誰もいなかったし何もなかった。しんと静まり返った部屋があるだけであった。

「私のね」

「そうだね」

「じゃあ一人あたりビール一本ってところで」

「有り難う」

話はそれで終わりであった。何もない部屋のかわりにビールがあった。それだけだった。

彼女は笑いながら襖を開けていく。その向こう側に誰もおらず何もいないのがわかっていくから。けれどひよっとしてあの時襖の向

こうに何かがいたらどうなっていたか。ふとそう考えたりもした。けれどそれはあえて言わないことにした。にこやかに笑っている彼女に対しては。そのままにしておいた。

襖 完

2007・12・23

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6009d/>

襖

2010年10月8日15時50分発行